

北宋天聖令・唐開元二十五年令賦役令

大津 透

はじめに

一九九九年に、上海師範大学の戴建国氏により「天一閣藏明抄本『官品令』考」(『歴史研究』一九九九年三期)が発行され、浙江省寧波市の天一閣(中国有数の蔵書コレクションである)に所蔵される『官品令』という標題をもつ写本が、実は北宋の天聖令であり、天聖令の田令から雑令にいたる巻二一から巻三〇までの十巻分が完存していることが明らかにされた。しかも北宋天聖令は、唐令を利用しそれに改変を加えており、その上現在用いられていない唐令条文も付載している、唐令＝開元二十五年令のかなりの部分が明らかになることも示された。

何とも驚くべき、二十世紀の最後をかざる大発見であり、宋代史のみならず、唐令の研究、さらには日本の律令制研究にも裨益するところ大であり、多くの関心をひいている。

全体の三分の一、田令・賦役令・倉庫令・厩牧令・関市令(捕亡令附)・医疾令(仮寧令附)・獄官令・宮繕令・喪葬令(喪葬年月附)・雑令の各篇目が残存しているが、現在令全文が発表されているのは田令と捕亡令のみである(兼田信一郎「戴建国氏発見の天一閣博物館所蔵北宋天聖令田令について」(『上智史学』四四、一九九九年)、池田温「唐令と日本令(三)唐令復原研究の新段階」(『創価大学人文論集』一二、二〇〇〇年)、戴建国「唐『開元二十五年令・田令』研究」(『歴史研究』二〇〇〇年二期)を参照)。現在、天一閣博物館において当該写本の閲覧は修補等の理由で不可能となっていて、戴氏が調査された情報以外では、令文を知ることができない状況にある(筆者も一九九九年十一月に寧波に赴いたが無駄足であった)。

こうしたもどかしい状況の下、昨年末に戴建国氏が『宋代法制初探』(黒龍江人民出版社、二〇〇〇年九月)を出版されたことが日本にも伝わった。そこには「宋『天聖令・賦役令』初探」と題した新稿が収められており、天聖令賦役令全五〇条の全文が掲げられている。

池田温先生からの示唆もあり、また戴建國氏からわざわざ筆者にまで著書の寄贈をうけたので、幸い紙幅に余裕もあるのでこの場をかりて令文本文の紹介をすることとした。時間的余裕がないので、詳細な考察は別稿を期すことにしたい。

一、天聖賦役令の紹介と唐令の復原

天聖賦役令はまず二十三カ条があり、「右、並びに旧文に因り新制を以て参^まへ定む」とあり、これは、唐令文をもとにして修補を加えて北宋代に現行法となっている条文である（以下これに宋1―宋23の条文番号を付す）。つづいて二十七カ条を付載し、これは「右の令、行なはれず」とあり、北宋代には継承されなかった唐令（開元二十五年令）の条文が列挙されている（これに唐1―唐27の条文番号を付した）。

後半は、唐賦役令の条文そのものであるが、前半の各条にもそのものになった唐令条文があったと想定される。前半も後半もそれぞれの配列順は、本来の唐令の配列順を反映しているはずなので、ここでは両者を組みあわせて配列することで（日本令などを参考に配列したが、なおいくつかのほかの配列の可能性は残る）、一応、本来の唐開元二十五年賦役令の条文配列に近いものをめざしてみた。全体の構成が多少ともうかがえればと思った。なお唐令の部分は一応このままの形で条文と考えられるが、前半の宋代に機能した条文について、もとになった唐令と一対一で対応するか、例えば唐令二条をあわせて一条を作った可能性（例えば1条や30条）を考慮する必要もあり、はたして唐賦役令が五十カ条から成っていたかは、なお確定できないだろう。

配列にあたっては、宋1―宋23については、（参考）として、唐令の形をうかがうため、『唐令拾遺』『唐令拾遺補』（拾遺・拾遺補と表記）での復原唐令案、および日本養老令（養老と略す）の対応条文を付記した。また唐1―唐27についても、必要に応じて復原や校訂の参考として（参考）を付した。

戴氏論文は簡体字であり、他によるべき釈文や写真はないので、たとえば「并」と「並」あるいは「于」と「於」など原文がどちらか判断できない文字があり、適宜文字を決めた。また脱字と思われる字は「」で補い、一応正字体で翻刻している。なお、この写本は、脱字や誤字がきわめて多く、意味が通じていない部分が多く残った。大方の御教示をいただければ幸いである。

1（宋1）諸税戸、並隨郷土所出、^{（絹？）}綱絶布等若當戸不^{（成？）}充正端者、皆隨近合充、并於布帛兩頭各令戸人具注州縣鄉理戸主姓名及某年月某色税物。受訖、以本司本印^{（印）}計之。其許以零税納錢者、從別敕。

（参考）拾遺補一丙〔開二五〕諸課戸、每丁租粟二石。其調絹絶布、並隨郷土所出。絹絶各二丈、布二丈五尺。輪絹絶者、兼調綿三兩。輪布者、麻三斤。其絹絶爲疋、布爲端、綿爲屯、麻爲綬。若當戸不成正端屯綬者、皆隨近合成。其調麻每年支料有餘、折一斤輪粟一斗、與租同受。其江南諸州租、並廻造納布。養老2 凡調、皆隨近合成。絹絶布兩頭、及絲綿蕤、具注國郡里戸主姓名年月日。各以國印印之。

2（唐1）諸課（役）、毎年計帳至戸部、具錄色目牒度支支配（來）年事、限十月三十日以前奏訖。若須折受餘物、亦豫支料、同時處分。若是

軍國所須、庫藏見無者、錄狀奏聞、不得〔便脫之〕卽科下。

3 (唐2) 諸庸調物、每年八月上旬起輸、三十日內畢。九月上自各發本州。庸調車未發〔飛脫之〕間、有身死者、其物却還。其運脚出庸調之家。任和雇送達、所須裘束調度、並折庸調充、隨物輸納。

4 (唐3) 諸租、淮州上牧獲早晚、斟量路程險易遠近、次第分配。本州牧獲訖發遣。十一月起輸、正月三十日納畢〔收獲〕 (江南諸州從水路運送之處、若冬月水淺、上灘艱難者、四月以後運送、五月三十日納畢)、其輸本州者、十一月三十日納畢。若無粟之鄉輸稻麥者、隨熟卽輸、不拘此限。納當州未入倉窖及外配未上道、有身死者、并却還。

5 (宋2) 諸貯米處、折粟一斛輸米六斗。具雜折皆隨土毛、准當鄉時價。

(參考) 拾遺補補一〔開二五〕(後半) 應貯米處、折粟一斛輸米六斗、其雜折皆隨土毛、准當鄉時價。(准、拾遺補作準)

6 (唐4) 諸租須運送、脚出有租家。如欲自送及雇運水陸、并任情願。其有課船處、任以課船充。

7 (唐5) 諸輸租調庸、應送京及外配者、各遣州判司充綱部領其租、仍差縣丞以下爲副。不得僦勾隨便糴輸。若之配〔分〕之後、損闕不充數、及增減廢置、入城鎮輸納早晚須別同改者、度支申奏處分。

8 (宋3) 諸州稅調庸配貯諸處、及同〔造〕折租調雜餘取物者、送納訖

并具帳申三司。

(參考) なし。

9 (唐6) 諸課役破除、見〔在〕及帳後附、並同爲一帳、與計帳同限申。

10 (唐7) 諸應食實封者、皆以課戶充。集戶數、州縣與國官邑官折帳共收其租調。均爲三分、一分入官、二分入國(公主所食邑卽全給)。入官者、與租調同送。入國邑者、各准配租調遠近、州縣官司收其脚直、然後付國邑官司。其丁亦准此。入國邑者收庸調。〔實封〕

(參考) 拾遺補一〇〔開七〕諸親王及公主以下、有功之臣所食封邑、皆以課戶充。州縣與國官邑官、共執文帳、准其戶數、收其租調。均爲三分、其一入官、其二入國。公所食邑則全給焉。各準配租調遠近、州縣官司收其脚直、然後付國邑官司。其丁亦準此。入國邑者收其庸。

11 (唐8) 諸田、有水旱蟲霜不熟之處、據見管之田、州縣檢實、具帳申省。十分損四以上、免租。損六免租調。損七以上、課役俱免。若桑麻損盡者、各免調。其已役已輸者、聽折來年。經雨後、不在折限。〔二年〕其應損免者、兼計麥田爲分數。

12 (宋4) 諸州豐儉及損免、并每年附遞申。

(參考) なし。

13 (宋5) 諸邊遠州、有夷獠〔雜〕類之所、應有輸役者、隨事斟量、不必同之華夏。

(參考) 拾遺一二〔開二五〕諸邊遠州、有夷獠雜類之所、應輸課役者、隨事斟量、不必同之華夏。

14 (宋6) 諸戶役、同任官應免者、驗告身、灼然實者、注免。其見充雜任授流內官者、皆准此。自餘者不合。

(參考) 拾遺一三〔開七〕〔開二五〕諸任官、應免課役者、皆待錮符至、然後注免。符雖未至、驗告身、灼然實者、亦免。其雜任被解應附者、皆依本司解時日月據徵。

15 (唐9) 諸春季附者、課役並理。^(徵)夏季附者、免課役從。^(從役)秋季以後附者、課役俱免。其詐冒隱避、以免課役、不限附之早晚、皆理當發年課役。逃亡者附亦同。

16 (唐10) 諸戶口中男以上及給侍老疾人死者、限十日內、里正與死家、注死時日月連署、經縣申記。^(附?)應附除課役者、即依常或。^(式)

17 (唐11) 諸人居狹鄉、樂遷就寬鄉、去本居千里外^(復)後三年、五百里外^(復)後二年、三百里外復一年。一遷之後、不得更移。

18 (唐12) 諸沒落外蕃得還者、一年以上復三年、二年以上復四年、三年以上復五年。各給賜物十改。^(段)外蕃之人投化者、復十年。其夷獠新招尉、及部曲奴被於附戶貫者、復三年。應給賜物、於初到州給三段、餘本貫給。

19 (唐13) 諸以公役使二千里外還者、免一年課役。

20 (宋7) 諸孝子・順孫・義夫・節婦、志行聞於鄉閭者、具狀以聞、表其門閭、同籍悉免色役。有精誠冥感者、別加優賞。

(參考) 拾遺一九〔開七〕〔開二五〕諸孝子・順孫・義夫・節婦、志行聞於鄉閭者、州縣申尚書省奏聞。表其門閭、同籍悉免課役、有精誠致應者、別加優賞。(精誠致應、養老令作精誠通感)

21 (宋8) 皇宗籍屬宗正者、及太皇太后・皇太后・皇后本服總麻以上親、皇太子妃本服大功以上親、親王妃及內命婦一品本服葬以上親、五品以上父祖兄弟、並免色役。

(參考) 次條參照

22 (唐14) 諸文武職事官三品以上、若郡王父祖兄弟子孫、五品以上及勳官三品以上有封者、若國公父祖子孫、勳官二品若郡縣公侯伯子男并子、並免課役。

(參考) 拾遺補二〇〔開七〕〔開二五〕諸皇宗籍屬宗正者、及文武職事官三品以上、若郡王周親及同居大功親、五品以上及國公同居周親(職事勳官三品以上有封者、若縣男父子)、並免課役。
(なお、拾遺は「太皇太后皇太后皇后總麻以上親、內命婦一品以上親」を復原していた)

23 (唐15) 諸正・義及常平倉督、縣博士、州縣助教、視流外九品以上州縣市令、品子任雜掌・親事・帳內、國子・太學・四門・律・書・算等學生、俊士、無品直司人、衛士、庶士、虞侯、牧長、內給使、散使、天文・醫・卜・按摩・咒禁・樂園等生、諸州醫博士・助教、

31 (唐22) 諸丁匠歲役工^(二)上十日、有閏之年加二日。須畱役者、滿十五日免調、三十日租調俱免^(後役)。日少者、計見役日折免^(後)。兼正役並不得過五十日。其在路遠之處、須相資者、聽臨時處分。其丁赴役之日、

長官親自點檢、并閱衣糧周備、然後發遣。若欲雇當州縣人、及遣部曲^(遣)伐役者聽之。省弱者不合。耶於送簿名下、各住代人貫屬姓名。其匠、欲當色雇以人伐役者、亦聽之。

(參考) 本條は養老令4と同内容。

32 (宋10) 諸丁匠上役、除程外、各准役日給公糧赴作。

(參考) 拾遺補五〔唐〕諸丁赴役之日、除程糧外、各准役日費私糧。長官親自點檢、并閱衣糧周備、然後發遣。若欲雇當州縣人、及遣部曲代役者聽之。劣弱者不合。即於送簿名下、具注代人貫屬姓名。其匠、欲當色雇巧人代役者、亦聽之。
(拾遺補は、養老4歲役條後半に當たる字句の存在を推定し、拾遺五條とあわせて一條として復原し、二五條のあとに配列した)

33 (唐23) 諸丁匠赴役者、皆具造簿、於未到前五日內、豫送簿尚書省分配。其外配者、送配處、任當州與作所相知追役。皆已近及遠、依名分配。

34 (唐24) 諸丁匠不役者收庸。無絹之鄉、絁布參受^(參)。日別絁絹各三尺、布即三尺七寸五分。

(參考) 通典卷六食貨 諸丁匠不役者收庸、無絹之鄉、絁布參辰。(日別絁絹各三尺、布則三尺七寸五分)

35 (宋11) 諸丁匠赴役、有事故不到闕功者、與後番人、同送陪功。若故作稽違、及逃走者、所司即追捕決罪。仍專使送役處陪功。其合徒者免陪。

(參考) 養老25 凡丁匠赴役、有事故不到闕功者、與後番人、同送陪功。若故作稽違、及逃走者、所司即追捕決罪。仍專使送役處、陪功、即給雇直。

36 (宋12) 諸科喚丁匠、皆量程遠近、刻其於當州界路次、更集及多者、本屬以官領送、不須緣歷州縣。其不滿百人者、臨時捍遣。

(參考) なし。

37 (宋13) 諸役丁匠、皆十人外、給一人充火頭。不在課功之限。元日・冬至・臘・寒食、並放假一日。病疾及遇雨雪、不堪工作者、計日除功(糧盡者、給糧陪役)。雖雨雪非露役者不除。

(參考) 養老26 凡役丁匠、皆十人外、給一人充火頭。疾病及遇雨、不堪執作之日、減半食。闕功令陪。唯疾病者、給役日直。雖雨非露役者、不在此限。

38 (宋14) 諸匠京有大營造、役丁匠之處、常令官司巡行。覺舉非違、仍令御史隨事彈糾。

(參考) 養老27 凡在京有大營造、役丁匠之處、皆令彈正巡行。若有非違、隨事彈糾。

39 (宋15) 諸丁匠在役、遭父母喪者、皆本縣牒役所放還。殘功不追(貫不屬縣者、皆所由司申牒)。

（參考）養老28 凡丁匠在役、遭父母喪者、皆國司知實申役所
即給役直放還。

（參考）養老 29 凡供京藁藍雜用之屬、每年民部、預於畿內斟量科下。

41 (宋17) 諸應置頓及供驛須貯粟草等數、皆承三司牒支配。若別有破費者、至時填備。

(参考) なし。

42 (宋18) 諸役工匠、皆量功力、均課輕重。日滿卽放。其主當官司、不加檢校致失公程者、節級推科、仍附年考。

（參考）養老 30 凡役工匠、皆斟酌功力、均課輕重。日滿即放。其主當官司、不加檢校、致失功程者、節級推科。仍附考殿。

43 (宋19) 諸^{〔來有〕}丁匠往有來重患不堪勝致者、路次州縣置附隨便村坊安置供給醫藥。若患稍輕、堪前進者、所領官司徒伴提携將行。如到役所病患、到處安置、並給醫藥珍療^{〔診〕}、待差則役。若無糧食、卽於隨近倉給。

（參考）養老 31 凡丁匠往來、如有重患、不堪勝致者、畱付隨便郡里、供給飲食、待差發遣。若無糧食、卽給公糧。

44 (宋20) 諸丁匠赴役死身者、官爲收殮、並於〔路〕次明立俾銘、數遣檢行、并移牒本貫。家人至日、分明付領。

(參考) 養老 32 凡工匠赴役身死者，給棺。在道亡者，所在國司、以官物作給。並於路次埋殯。立牌、并告本貫。若無家人來取者，燒之。有人迎接者，分明付領。

45 (宋21) 諸役丁匠者、皆晝作夜止。其五月六月七月、從已至未、放聽休息。

（參考）**養老 33** 凡役丁匠者、皆晝作夜止。其六月七月、從午至未、放聽休息、要須役者、不在此例。

46 (唐25) 諸租調庸及丁匠、應入京若配餘處者、尙書省預令本道別於比州相知、量程遠近、以次立限、使死後相避、勿令停壅。其租、若路由開河及從水連者、亦令水未凍前、到倉輸納。

47 (唐26) 諸丁有所營造、皆起八月一日從役、四月一日以後亭。停其營造田、銅冶及鐵作磚瓦、運木之處、不在此例。若量事、要須不可停廢者、臨時奏裁。

48 (宋 22) 諸爲公事、須車牛人力傳送、而令條不載者、皆臨時聽敕。差科之日、皆令所司量定須數行下、不得令在下有疑、使百姓勞擾。(參考) 養老 34 凡爲公事、須車牛人力傳送、而令條不載者、皆臨時聽敕。差科之日、皆令所司量定須數行下。不得令在下有疑、使百姓勞擾。

49 (唐27) 諸朝集使赴京貢獻、皆盡當土所出。其金銀、珠玉、犀象龜具、凡諸珍異之屬、皮革、羽毛、錦、麝、羅、綢、綾、絲、絹、絺

希^(布)之類、添蜜、香藥、及盡色所須、諸是服食器玩之物、皆准絹爲價、多不得過五十疋、少不得減二十疋、兼以雜附及官物市充。無則用正倉。其所送之物、但令無損壞穢要^(惡)而已。不得過事修理、以致勞費。

(參考) 拾遺補二七〔永〕〔開二五〕諸諸州朝集使貢獻、皆盡當土所出。其金銀・珠玉・皮革・羽毛・錦・麝・羅・穀・紬・綾・香藥・彩色・服食・器用、及諸珍異之類、准絹爲價、不得過五十疋。並以官物充市。其所送之物、但令無損壞穢惡而已。不得過事修理、以致勞費。

(本條は養老35諸國貢獻物條から字句の存在を推定した)

50 (宋23) 諸有雜物科稅、皆明寫所須^(前)道物數、及應出之戶、印署榜縣及村坊、使衆庶同知。

(參考) 拾遺補補三〔唐〕諸稅斂之數、書于縣門・村坊、與衆知之。

養老36 凡調物及地租雜稅、皆明寫應輸物數、立牌坊里、使衆庶同知。

二、若干の覚え書き

右に配列した天聖令賦役令条文から、開元二十五年賦役令の条文の一覽表を作ったのが、次頁の表である。仮の条文名と内容を略記し、右には、対応する『唐令拾遺』『唐令拾遺補』の復旧条文番号、対応する日本養老令の条文番号をあげた。条文番号で、宋(1)など括弧がついているものは、北宋令文と唐令文の内容が大幅に違うと想定されるもの、唐令拾遺の条文番号に括弧を付したものは、復原が令文のごく

一部であるものを示す。

さて、この表をみてまず気付くのは、6条から9条など、從來全く存在すら知られなかった賦役令条文が発見されたことである。また35条以下のように、丁匠関係の規定は、日本令に多くの規定があるが、これらはもともなった唐令が多く存在し、ほぼ同内容であることが知られた。この点は日本令の分析からほぼ推測されていたが、逆に日本令29藁藍条(京に供する雜用品を畿内に賦課する規定)のように、日本独自の規定と考えられてきたものも、40条にそのものになる宋令(唐令)の存在が知られたのは大きな発見である。

次には逆に、從來唐令の逸文として復原されていたのに、この表にでてこない条文がある。『拾遺』六条の蕃胡内附者の戸から稅錢を徵する規定、『拾遺』七条の嶺南諸州の稅米規定がみえない。これらは賦役令に規定があったことは疑いないが、典拠史料をみると、『六典』に規定があるが、『通典』には全くみえず、あるいは開元二十五年令で削除されたのだろうか。この二条については、唐朝の外国人・異民族支配との関係で多くの議論があるところであり、今後の検討を期待したい。

『拾遺』九条の義倉の徵收規定は、養老賦役令に6義倉条もあり、みえないことが不審である。これも『六典』が典拠であり、開元二十五年令での削除も考えられるが、あるいは別の篇目に規定されたか。また『拾遺』は復旧しないが、日本令には37条に規定がある、雜徭の規定がみえないのも、意外である。『白氏六帖事類集』卷二二の「充夫式」に「戸部式」として引用されるので、あるいは式に規定があったのだろうか。もともと唐賦役令の最終条は雜徭についての規定であったとするのが通説であり、なお断案をえない。

唐開元25年賦役令の条文一覧

推定	宋	唐	条文名(仮称)	内 容	唐令 拾遺	養老令	備考
1	(1)		課戸条	租調の税額・合成・墨書	1・2	1・2	
2		1	計帳条	度支による支度国用	8	5	
3		2	庸調物条	庸調の輸納期限、死者分の返却	3	3	
4		3	租条	租の輸納期限、死者分の返却	補1	田令2	
5	2		貯米条	米による折納、雑折	々	7	
6		4	租運送条	租の運送、課船			
7		5	輸租調庸条	租調庸の送京・外配			
8	3		諸州条	配貯・折納時の報告規定			
9		6	課役条	課役破除・帳後附の報告			
10		7	食実封条	実封に関する規準・支給	10	8	
11		8	水旱条	災害時の課役免除	11	9	
12	4		諸州豊儉条	豊儉・損免の報告			
13	5		辺遠州条	辺遠州の課役の特例	12	10	
14	(6)		錫符条	課役の免除・徴収手続	13	11	
15		9	春季条	課役附除の季節による扱い	14	12	
16		10	口及給侍条	死亡時の報告		13	
17		11	居狭郷条	狭郷から寛郷へ移住した復除	15	14	
18		12	没落外蕃条	外蕃没落人が帰国や帰化した時の復除	16・17・18	15	
19		13	公役使還条	公役使で二千里外から還った時の復除		16	
20	7		孝子順孫条	孝子等の表彰と免課役	19	17	
21	8		皇宗条	皇族や皇后親族の課役免除	20		
22		14	職事官三品条	高位者親族の課役免除	20	18	
23		15	正義常平倉督条	雜任等特定の状態による課役免除	(21)	19	拾遺22は削除
24		16	職事六品条	六品以下等親族の実役免除	(23)	20	
25		17	蔭親属条	蔭親属の課役免除			
26		18	漏刻生条	雜任等特定の状態による雜徭免除		19	
27		19	父母喪条	父母の喪にあった時の徭役免除	(補2)	21	
28		20	応役丁条	役丁の計画	24・26	22	
29		21	州丁支配条	州の丁数不足			
30	9		戸等条	戸等と徴発の規準	24・25	22・23	
31		22	歳役条	歳役の徴発	4(5)	4	
32	(10)		丁匠上役条	私粮準備	5		
33		23	丁匠赴役条	丁匠の赴役の手続		24	
34		24	庸条	庸の徴収	4	(4)	通典
35	11		有事故条	丁匠が事故により就役しない場合		25	
36	12		科喚条	丁匠を科喚する手続			
37	13		役丁匠条	丁匠の休暇や雨雪時の規定		26	
38	14		大營造条	京の大營造時の警備等		27	
39	15		在役遭父母喪条	丁匠が在役中父母の喪にあった時		28	
40	16		貯藁条	供京の藁を畿内諸県に賦す規定		29	
41	17		粟草等条	頓駅に粟草等を貯える規定			
42	18		斟量功力条	丁匠の労働量等の管理		30	
43	19		丁匠往来条	丁匠が往来途次に重病になった時		31	
44	20		丁匠身死条	丁匠死亡時の処置		32	
45	21		昼作夜止条	丁匠の労働時間・休息		33	
46		25	応入京条	租庸調・丁匠の入京、他所へ配納の規定			
47		26	丁營造条	營造の時期の規定			
48	22		車牛人力条	公事のため車牛・人力で伝送する規定		34	
49		27	朝集使貢獻条	朝集使の貢獻物	27	35	
50	(23)		庸調物雜稅条	稅物・額を揭示して衆知させる規定	補3	36	

次に令文配列については、次にふれる二カ条の配列の大きな変更を除けば、基本的に、『唐令拾遺』およびそれがもとにした養老令の配列とほぼ同じであることがわかる。つまり『拾遺』の配列はほぼ正しく、日本令は唐令の条文配列をほぼ踏襲したということである。⁽³⁾

右の配列からわかった大きな発見の一つは、すでに石上英一氏が指摘し、⁽⁴⁾『拾遺補』も採用しているように、『拾遺』八計帳条が、日本令とは異なり、冒頭に近い位置に配されていたことである。もう一点は、全くの新発見であるが、『拾遺』四・五の歳役・庸規定が31・32・34条など、賦役令後半の冒頭近くに配列され、日本令と大きく構造を異にしていることである。とくに31条は歳役の実役徴発規定で、34条で、実役につかない場合に庸を収めるとして付加規定として庸が規定されることは興味深い。すでに開元年間には歳役の徴発はなく殆どの場合庸を徴収していたと考えられるが、⁽⁵⁾唐令は庸は力役であるという建前を崩さなかったと理解できる。

以上の点をはじめ、賦役令の条文構造についての新知見から、賦役令の意図について迫ることが期待されるが、そのためには各令文の内容の詳細なかつ全体的な検討が必要であろう。しかし内容の検討に入るには、あまりにも準備が不足している。ここでは令文の紹介にとどめ、全体的検討は別稿を期すことにしたい。

註

- (1) 拙稿「唐律令国家の予算について」(『史学雑誌』九五―一二、一九八六年)。李錦綉『唐代財政史稿(上巻)』(北京大学出版社、一九九五年)六一―六二四頁。石見清裕「唐の内附異民族対象規定」(『唐の北方問題と国際秩序』汲古書院、一九九八年、初発表一九九五年)。堀敏一「中

華世界」(『東アジアのなかの古代日本』研文出版、一九九八年)。

- (2) 吉田孝「雑徭制の展開過程」(『律令国家と古代の社会』岩波書店、一九八三年)三五〇頁。

(3) 『拾遺補』は「唐日兩令対照一覧」において、一二辺遠州条(13条)を、六・七の異民族関係規定とあわせて、一一水旱条(11条)の前に配したが、もとの『拾遺』の順が正しかった。また石上英一「日本賦役令における法と経済についての二、三の問題」(『歴史学研究』四八四、一九八〇年)は、一九孝子順孫条(20条)を、二〇皇宗条、二一内外六品以下条(条文名は石上氏論文による、21・23条にあたる)の後にする配列案を示していたが、これを採用しなかった『拾遺補』の判断が正しかった。

- (4) 石上氏前註論文、六頁。

(5) 濱口重国「唐に於ける兩税法以前の徭役労働」(『秦漢隋唐史の研究』上、東京大学出版会、一九六六年、初発表一九三三年)五四二―五四八頁。青木和夫「雇役制の成立」(『日本律令国家論攷』岩波書店、一九九二年、初発表一九五八年)二六―二七頁。

〔付記〕なお本稿は、平成十二年度科学研究費特定領域研究A「古典学の再構築」B02班公募研究「日本における唐律令・礼の継受と展開」の成果の一部である。